

先人の知恵から

52

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸 由里子

今回は「み～む」まで以下の9個。残すは「ま行」の残りと「や行、ら行、わ行」のみ。今年中には終わるのかなと思いつつ。あと少し。

- 水清ければ魚棲^すまず
- 水の低^つきに就く如し
- 水を^う得た魚
- 三つ子の魂百まで
- 身の内の財は朽つることなし
- 耳は大なるべく口はしょうなるべし
- 実を見て木を知れ
- 無言は承諾
- 矛盾^{むじゆん}

<水清ければ魚棲まず>

人も余り精練過ぎると、人に親しまれず孤立してしまうということ。余りに水が澄んで透き通っていると、隠れるところがないので魚もすみつかないことから。

出典 孔子家語

何事も程々が良いのだが、白黒つけたがったり、完璧を求めすぎたりする保護者が増えたように思う。保護者だけではなく、時には先生方も同様の要求を出す。本人は精いっぱい頑張っているのに、先生がまだもう少し、もうちょっととハードルを上げてきたために、学校に行けなくなった子に何人かあった。その子が頑張ればもっと上を目指せると先生方は思っていたのだと思う。人の能力を測ることは中々難しい。教育者として専門の教育も受けてきた先生ですら見誤るのだ

から、まして保護者にしてみれば親の欲目で余計に上を考えてしまうのも仕方ないの
だろう。

幼児から様々な教育ツールが紹介されて
いる昨今では、ご近所やママ友同士で「あれ
が良い、いやこっちが良い」などとネットの
情報からツールを選び、我が子をより高み
へ登らせようと躍起になっている。

お稽古事でも教育でも、しっかりやらせ
ようと思ったら親がつきっきりになる。親
も大変だが子はもっと大変である。子ども
がちょっと気を抜こうものなら、「何やって
んの！」と怒られる。気を抜くこともできな
い。これでは勉強やお稽古事が嫌いになっ
てしまうだろう。

個々の能力に合ったやり方で、時には優
しく、時には厳しく教え導くだけではなく、
時には目を離し、気を抜ける時間も与えて
あげなければ子どもは疲弊してしまうだろ
う。最近の子どもたちが二言目には「疲れ
た」しか言わないのは何故だろうか？子ど
もたちの周りの水は澄みすぎていないだろ
うか？隠れてほっとできる場所はあるだろ
うか？親の目が届きすぎてはいないだろ
うか？そんなことを保護者達に考えてもら
う時、この諺を使っている。そして子育てに
ついて昔から言われていることだが、小さい
時は手を離すな、小学生は目を離すな、中
学生になったら片目をつぶれと伝える。見
すぎない、干渉しすぎないことも、子ども
が自律・自立的に育つためには大切なのだと。

<水の低きに就く如し>

ごく自然に物事が運ぶことのとえ。ま
た自然のなりゆきは、人の力では止められ

ないことのとえ。水が低い方に向かって
ながれるようなものであるということから。

出典 孟子

生きていけばいろいろなことが起こる。
何の問題もない人生などない。様々な問題
を乗り越えたりやり過ごしたり、時には打
ちひしがれたり、無かったことにしたりし
ながら人は生きている。どんな人もその問
題の大きさには差があっても、問題と向き
合うことは一緒である。そんな時、余りにも
問題が大きければただただ悪あがきするだ
けではなく、「待ってみる」ということも方
法の一つである。成り行きに任せてみると、
案外良いほうに転んだり、或いはそれ以上
悪いほうに行かないということが度々起こ
る。

先日も不登校の高校生の相談で、友人関
係を築けず、高校に入って夏休み明けまで
は頑張っていたが、結局不登校になった。腹
痛や下痢などの症状もあったので病院に行
って診断書を貰い、適応障害で「特別に配慮
が必要な生徒」とみてもらい、オンライン授
業を受けながらその後を過ごしていた。春
にはまたクラス替えがあるのだが、本人は
「どうせまた上手く友達が出来ないに違
いから2年もオンライン授業でやってい
く」と言っていた。余りクラス替えに期待さ
せずとも、上手くいかないこともあるの
で、「まずは教室に入ってみて、上手くい
かなかったらオンラインという風に考えてみ
ないか」と提案し、友達作りのシミュレー
ションを何度かして、新学期を迎えた。

実際教室に入ってみたら、幼稚園時代に
仲良しだった子と偶然同じクラスになり、
その子を軸に何人かの子と仲良くなった。

このまま上手くいくかどうかはさておき、とりあえずスタートは上手く切れた。そして本人は「学校がすごく楽しい」と満面の笑みで報告してくれた。学校が始まってすぐ一回休んだのだが、その時母親はまた不登校になるのではと不安がって電話をくれたのだが、訊いてみたら生理痛だったとか。朝もすんなり起きてさっさと支度をして出ていけるようにもなっていた。余り頑張りすぎないようにと少しブレーキを掛けたが、楽しそうな様子にこちらまで明るい気持ちになった。考えすぎて悪いほうに自ら進めてしまうより、一旦流れに身を任せてみると、結構いい具合に流れていくものだと改めて思った事例である。水は低い方に自然に流れ、やがて大海に注ぎ込むのだ。

<水を得た魚>

自分に適した環境や活躍の場を得て、生き生きとして活躍するようすのたとえ。

「水を得た魚のよう」ともいう。

この諺は保護者にも子どもにも度々使う。好きなことをしているときの顔は大人も子どもも変わりなく、楽しそうだし、集中している。砂場でずっとトンネルを掘っている子、大好きな折り紙であれこれ作っている子、ポケモンなどゲームの話を延々語る大人や子ども。〇〇博士と言われる大人や子どもも自分の得意なことについて語る時、その表情は本当に生き生きとしている。それが正に「水を得た魚」なのである。

子どもたちが学校でも家でも、何時もとほは言わないまでも、時々「水を得た魚」のように、生き生きと、元気のよい姿を見られる

様な、そんな学校や家庭であってほしい。

<三つ子の魂百まで>

幼い時の性格は、歳をとっても変わらないということ。「三つ子の魂八十まで」「三つ子の心百まで」「三つ子の知恵百まで」ともいう。三つ子=三歳の子ども。

この諺は知られていると思うが、性格というのはそうそう変わるものではないことを伝える時によく使う。小さい時中々泣き止まなかった子は、大きくなって頑固だし、小さい時怖がりだった子は、大きくなって不安が強かったりする。保護者も小さい時の性格を思い出してみれば、今の我が子の様子に頷けるのではないだろうか？

「自分も小さい時こんな感じだった」と言ってくれる保護者もいる一方で、「自分はもっとしっかりしていた」とか「自分はなんでもできたのに、この子は何もできない」と否定的な事ばかり言う保護者もいる。そういう保護者に対しては、夫婦双方のDNAが入っていることを考えるとそれぞれ劣性遺伝子も優性遺伝子もあるから、双方の親の代まで見てみる必要があると伝えたりする。そして「ダメなところばかり見ないで、本人の良いところを見るようにしましょう」と伝えて様子を見ることが多い。素直に「良いところ」探しをしてくれる保護者もいるが、「全然見つけられなかった」という保護者もいる。後者は「良いところ」の基準が高いことが多い。本人を見ながら、「こんなところが良いところではないかな？この良い性格はずっと大人になったらこんな風になるから将来楽しみですね」などと伝える。

例えば、遊んでいるときにあちこち気が散ってあれこれ引っ張り出してくる子の場合は「気が良く回る子ですね。動きも早い。こういう子はきっとサービス業とか、セールスとか、そういう仕事では自分を生かして良い成績を残す人になるかもしれませんね」と。保護者が望んでいる職業とは違うかもしれないが、適材適所で考えてもらえるように、見方を変えてもらえるように話をしている。

<身の内の財は朽つることなし>

身にそなわった知識や技能は決してなくなる**ない財産であり、生涯役に立つ**ということ。「身の内の宝は朽ちることなし」ともいう。

よく、子どもたちから「勉強なんてなんになるんだ」という言葉を聞くことがある。面白くないと勉強は負担でしかない。まして、よくわからないと更に嫌になる。好き嫌いも影響する。算数が苦手な子は「算数なんて必要ない、電卓で計算すればいい」というし、国語が嫌いな子は「漢字なんて覚えなくてもスマホやパソコンで何とでもなる」という。確かに最近はAIも登場し、勉強することへの意欲がますます削がれているように感じることもある。

しかし、人生どこで何にぶつかるかわからない。長い人生を考えたら、学んだことを使える時は必ずある。特に義務教育までの内容は使われる知識であろう。

学びは学校だけで得られるものではない。遊んでいても、運動をしていても、家事をしていても、何もかもが学びであり知識にな

る。そしてそれらは生きる知恵として役に立つことが多い。

学校での勉強が一番その意味を伝えるのが難しいように思うが、この諺を使い、いつか役に立つ時が来るから、最低限でも頑張っておこうと伝えるようにしている。

<耳は大なるべく口は小なるべし>

知識や情報はできるだけ広い範囲から得るのがよいが、それを人にしゃべるのは控えめにせよということ。

「口は禍の元」とも言って、人に何かをいう時は気を付けねばならない意味で「口は小なるべし」なのだが、「耳は大なるべし」は余り聞かれない諺かと思う。よく人の話を聴くことは、自分の知識を増やすためにはとても大切なことだが、最近はどうしてもネット情報という文字情報に頼りがちで、ニュースを聴いたり、人と生の会話を楽しんだりすることがずっと減った。人と接することで学ぶことは沢山ある。人はそれぞれ違った環境で育ち、違った考え方、感じ方を持っている。自分とは違う環境や考え方、感じ方を知ることは、自分を広く育ててくれる。多くを聴けば多くを学べる。但しそうして得た知識を披露するときは、遠慮がちにするのが良いだろう。勿論間違った情報ではないことを確認する必要はネットでも耳から聞いたものでも同じである。

英語では・・・

From hearing comes wisdom; from speaking, repentance. (聞くことは知恵

のもと、語ることは悔いのもと)
Keep your mouth shut and your eyes open. (口は閉じておけ、目は開けておけ)

<実を見て木を知れ>

早合点せず、じっくりと考えて確実な判断をした方がよいということ。なった実を見てからその木の価値や特質を判断せよという意から。

この諺は自分への戒めでよく使っている。早とちりが多いからで、もう少しゆっくり見て考えようと自分に言い聞かせている。実がなるまで待つのは到底できないが、そのくらいのつもりで、少しそのものをよく観察し、よく考えて判断すべきという意味である。

物事が速く進むようになってから、余り時間をかけて考えたり、眺めたりしている余裕がなくなった。子どもも大人も急かされて生きているのが今の時代。急かされると失敗が多くなるし見誤ることも増える。だからあえてこの諺を引っ張り出してみた。

英語では・・・

A bell is known by the sound. (鐘の善し悪しは音でわかる)

A tree is known by the fruit. (木は実によって知られる)

<無言は承諾>

異議があっても何も言わないでいるのは、承諾したのと同じであるということ。

この諺は、ぐるぐる思考に入ってしまう子に伝えている。どういったらよいのだろう、こう言ったらどんな風に思うかな、などとぐるぐる考えて聴かれたことに中々答えられず、黙っている子が結構いる。思いついたまま話せばよいと言っても中々できない。そこでこの諺を出して、まずは賛成か反対か等意思表示を先にしようと伝える。「今考えてるからちょっと待ってね」とか「理由は後で言うけどとりあえず反対」とか、「どちらでもよい」とか……。何でも良いからまず一言言っておこうという。

学校でも先生から叱られて「なんでこんなことしたんだ」と言われたときに、ぐるぐる考えてしまうと、更に先生から追い打ちをかけられることにもなりかねない。だから最初に「すみません」とか一言言ってから、「何故こうしたかについては今整理中です」と伝えて待ってもらおうと話す。なんと言ったらよいかかわからないから結局黙ってしまうのだ。でもこの諺を伝えると、「え、それは困る。別に承諾しているわけではないのに」となるので、最初の一言のレパトリーと一緒に考えるようにしている。

<矛盾>

前に言ったことと後に言ったことをつじつまが合わないこと。論理が一貫しないこと。「盾」は「楯」ともかく。矛=やり・ほこ。盾=たて。

出典 韓非子

この諺は殆どの方が知っていると思う。もともとの話は、武器屋が矛と盾を売っていて、「この矛はどんな盾をも通す凄い矛だ」

と言って売っており、一方盾についても「この盾はどんな矛も通さないほど強い盾だ」と言って売っていたところ、ある人が「ではその矛でその盾を突いたらどうなる？」と武器屋に言ったところ武器屋が困ったという話から来ている。つまりつじつまが合わない話で、武器屋はどちらの武器も売ることができなくなる。世の中にはこういう話が時々ある。

子どもの場合は特に矛盾する話になることも多い。気持ちも考えもころころ変わるとし、そこを突き詰めても「わすれた」とか言って逃げるのがおちである。そんなことで親子げんかに発展することもある。保護者によってはいちいち証文を書かせたりする。言ったことに責任を持つてというのは正しいだろうが、そこまでしなくてもとは思ふ。特に小学校低学年では矛盾に気づかないことが多い。論理思考はもう少し成長してからになるので。でも保護者はそんなことはお構いなしに叱る。

嘘つき呼ばわりすることさえある。子ども自身は嘘をついたつもりもないのだ。

矛盾を理解できるようになるまで、子どもの言うことに右往左往せず、どんと構えてみてあげてほしいと思う。

子家語二十七巻」とあるが、その内容に関しては殆ど伝わらず、二十七巻本はその後ほとんどなくして散逸したとみられている。顔師古の注では、「伝世本に非ず」としている。現在に伝わる『孔子家語』は魏の王肅が再発見した者に注釈を加えたと賞する44編の物である。

孟子・・・七編

中国、戦国時代の中期の思想家。孟子の言行を

門人が編纂したもので、『大学』『論語』『中庸』とともに四書の一つ。性善説に基づく道徳論を説き、霸道（武力による政治）を否定して王道（仁徳による政治）を提唱している。

韓非子・・・五十五編

中国、戦国時代末期の思想家韓非の尊称。韓の公子（貴族の子）。荀子に師事して刑名学（けいめいがく 法治主義）を学んだ。国の弱体化を憂い国王を諫めたが入れられず、発憤して「韓非子」五十五編を著して法による政治を論じた。のち、秦に使いしたとき、謀略にあい自殺した。

出典説明

孔子家語・・・十巻44編

『論語』に漏れた孔子一門の説話を収集したとされる古書。『漢書』芸文志論語部に「孔